

「建物が見えてきました！ あれがセヌイ村ですか？」

ブランカは少し先に見えた村を指さす。

「おう、ブランカにも見えたなら昼までに着くな。残りのスコーンも食べちまうか？」

ルークは「歩きながら食べるものじゃない」と言いつつも、鞆から最後の袋を取り出し、二人に渡した。

「あんがと。ところで、セヌイに来たってことは『異物の魔物』か？」

スコーンを頬張るユノとブランカの視線がルークに集まる。ルークはスコーンを一口食べようと手に持ったスコーンを口に近づけていたが、そっと戻した。

「城下町を出る前日に『見慣れない魔物』の報告があっただけで、確証はない」

早口で言い終えると、ルークはスコーンを口元に持つていき、意を決してかぶりついた。ユノは口いっぱい頬張ったスコーンを急いで飲み込み、ルークに提案する。

「村に着いたら駐在兵の奴らに聞いてみるか」

ルークが頷くと、ブランカも同じく頷いた。

セヌイ村に辿り着くと、村の至る所で様々な色に染められた布が干され、城下町よりも鮮やかな景色が広がっていた。

「きれいな場所ですね……」

ブランカはあちこち見回して、そんなことをつぶやいた。

「そうだろ？ セヌイは布染めが有名なんだ」

ユノが解説していると、村の入り口にいた青年が近づいてきた。

「騎士さん、こんにちは。よくご存じですね」

青年は簡素な槍を手に持って、町の入り口を警備している、自警団の一員であることが窺えた。

「そりゃ、普段着はこの村から卸されたヤツ着てるからな、世話になってるぜ」

ユノは自警団員と気さくに話す。彼も気を良くして、更に話を続ける。

「ありがたいことです。変な魔物さえ居なければ、布染めに使う湧き水の洞窟の景観も楽しんでいただけるのですけどね」

ユノはルークに目配せする。ルークはユノに任せることにして、ユノに促す。

「オレたち、その魔物を討伐しに来たんだ」

話が違う、ルークは顔にこそ出さなかったが、腕を組み、息を漏らした。

「そうだったんですね、助かります。詳しいことは駐在兵の方がよく知っているので、案内します」

三人は青年に先導され、村の中を進んでいく。青年の後ろで、ルークはユノに苦言を呈した。

「おい、『異物の魔物』じゃなければ討伐の必要はないだろう。なぜ引き受ける前提で話を進めるんだ」

「え、困ってんなら助けるのがオレの仕事だろう？」

ユノの言葉に、ブランカもうんうん、と頷く。

「ブランカは『研究対象』だ。人助けは暇なときにしろ」
ルークが諫めると、二人は揃って不満そうに口を尖らせた。ブランカがユノから良くない学び方をしている、とルークは頭を抱えた。

駐在兵の元へ着くと、ユノと同じ鎧を着た女が出迎えた。ユノはまた、気さくに話しかける。

「よお、魔物が出たって聞いたぜ」

「おお、王宮から心強い人が来てくれたね。助かるよ」
「そりやどーも。で、どんな奴が出たんだ？」

「……あー、その」

ユノと駐在兵はトントン拍子で会話を進めていたが、駐在兵はルークの視線に気づき、言葉を詰まらせる。

「『異物』じゃないだろうね。スライムのデカイ奴、みたいな」

大きなスライム、と聞いてルークは思い当たる魔物を思い出した。

「『デカイム』という魔物かもしれない。この辺りでは見ないが、西の『竜域』での発見例が多く、湿度の高い洞窟を好む傾向があると言われている」

「デカイム……」

ブランカは少しにやけていた。それを見て駐在兵も口角を上げるが、眉は下がったままだった。

「まあ、そのまんま名前だね。……実を言うと、アタシはあまり魔物の相手は得意じゃない。三人に頼めるなら、討伐をお願いしたい」

ルークは断ろうと口を開くが、ユノがそれを制止し、駐在兵には聞こえないように耳打ちする。

「待て待て、ルークの目的はこれだろう？」

ユノが指差した先は、ブランカが手に持つ武器だった。
「『たいしょうじっけん』？ だっけか。『異物』と『それ以外』の差を見るべきじゃないか？」

「……そんなの道中でやればいい、わざわざ討伐に向かうのは時間の無駄だ」

ルークは首を横に振る。デカイムは大した脅威ではなく、彼やユノが対処する必要は無い。

「移動のついでにやる方が時間の無駄だろお？」

「セヌイだったら、そのうち別の兵が来て対処できる。俺やユノの仕事じゃない」

二人の声は少しずつ大きくなっていく。ブランカが駐在兵の方を向くと、彼女は苦笑いを返した。それを見て、ブランカは意を決して頷く。

「……やります」

部屋が静まり返る。駐在兵は一瞬顔をほころばせたが、すぐにユノやルークの方を見る。ユノは勝ち誇ったようにやりと笑い、ルークはため息を吐いた。

「……洞窟まで案内してくれ」

村と接する岩壁に、湧き水の洞窟が口を開いていた。地面には滑らないように木材で道が敷かれている。

「この木の道を辿れば、デカイムが住み着いた場所に着く。その……どうか、無事で」

駐在兵に見送られ、三人は洞窟の中へと進んだ。

ルークは入ってすぐ、洞窟の壁を触り、感触を確かめる。岩肌を撫でると、隙間が生まれている部分から折れ、パラパラと破片が崩れる。

「……脆い。デカイムが岩を食い荒らしているな」

その光景を見たユノは、装填の手を止めた。

「……火薬はまずいか？」

「慎重に、と言ったところだな。そもそもこの湿気じゃ厳しいだろう」

ルークは鞆から魔石をいくつか出し、ユノに渡す。

「銃が使えないときはこれを使ってくれ、デカイムならこれで少しの間凍らせられる」

ユノはそれを受け取ると、服のポケットにしまった。

「ま、ブランカだって戦えるんだし？ いつもより楽かもな」

ユノは耳を澄ませながら先行し、ルークは一番後ろで周囲を観察する。ブランカは武器を構えつつも、ユノの後ろをスタスタとついて行く。

少し歩くと、道が枝分かれし始めた。最奥の地下水の噴出口への道は整備されているが、脇道は明かりが灯されている他は自然のまま放置されていた。

ユノは足を止め、振り返ってルークに尋ねる。

「デカイムの足音ってどんな感じなんだ？ 魔物の立てる音っぽいのが全く聞こえないんだが」

ユノに聞こえないものがルークやブランカに聞こえるはずもないが、全員で耳を澄ます。地下水が滲み出て地面へと流れたり垂れたりする音の他には、三人が立てる音だけが響く。

ルークはかつて読んだ本の内容を思い出しているものの、デカイムが音を立てるといったような内容は思い出せなかった。

「スライムの一種である以上、移動するときに聞こえるのは粘度の高い液体が流れる音、としか表せない」

「あ……じゃあ片っ端から探すしか無いか」

ユノは整備された道と脇道を見比べて、奥へ続く道へと踏み出した。

「まあ魔物が出て村の人が困ってんだったら、こっちに居そうだよな〜」

ルークもそれに合わせて進もうとしたが、ブランカは脇道をじっと見ていた。ルークが「どうした」と尋ねると、ブランカはルークを見上げ、「何でもないです」と首を横に振った。

その後も分かれ道の全てにおいて本道を選んで進み、一行は魔物と出くわすこともなく一番奥にまで辿り着いた。最奥には小さな地底湖があり、その底で魔石が輝き、湧き出る地下水の作る小さな波を照らしていた。

ブランカは物珍しそうに地底湖を覗き込む。

「自警団の方が言っていた通り、綺麗ですね」

ユノは「だな〜」と返しつつ、目ではデカイムの痕跡を探していた。ルークはブランカと同じように地底湖の底を眺め、デカイムの生態を思い出した。

「デカイムは魔石を主食とするはずだ。水底にこんなに残っているなら、デカイムはここまで来ていない可能性が高い。引き返すか」

ルークは来た道を振り返り、すぐ近くにある分かれ道の先を観察する。一つ戻るだけで、魔石の一つも見当たらない、ごく普通の洞窟の姿をしていた。

「ルークさん見てください、綺麗な石が落ちてました」

ルークはブランカに声を掛けられて振り返る。ブランカの差し出した手を見ると、角の取れた青い石が数個握られていた。

「ああ、光を通さないが、これも魔石だな。湖の中で石同士が擦れあって角が丸くなっていったんだろう」

ルークは魔石をじっくり見ようと一つ手に取ると、その軽さに違和感を覚えた。

「やけに軽いな」

そして、魔石の表面が一部ざらついているのを指で感じ取り、その面を表にした。すると魔石が軽石のごとく内部に小さな穴が多く開いているのが見て取れた。

「……魔石に多孔質のものは無いはずだが」

「へえ……じゃあ、この穴ってどうして開いたんですかね？」

会話する二人に、ユノも近づいてくる。

「デカイムって魔石食うんだろ？ その魔石、食べかすとかじゃねえか？」

「いや、スライムたちは魔石をまるごと取り込んで体内の粘液で完全に融かす。食べかすのようなものは出ない」
「えー、だとしたら消化しきれなくて出てくるとか」

「だから、排泄もしない……ん」

ユノが喋る間だけでなく、ルークが話していてもブランカはじっとユノのことを見上げていた。それが気になり、ルークはブランカに話を振る。

「ブランカ。言いたいことがあるなら言え」

「いやその、後ろ」

ブランカが指差した方を見ると、洞窟の天井の亀裂から大きなスライムが垂れてきていた。

「うわーっ！」

ユノはスライムが肩に掛かりそうなのを咄嗟に避けた。少し足を滑らせるも、ルークがユノの事を支え、体勢を整えさせる。そうしている間に、スライムは亀裂からどんどん体を出し、やがてユノよりも大きな塊となって三人の前にべちより、と音を立てて落ちてきた。

「デカイムだ。この大きさが隠れられる亀裂を見るに、銃を使うのは危険だ。魔術も難しい」

そう言いながらルークは剣を抜く。ユノも領きながら魔石を取り出し、いつでも投げられるように握りしめる。ブランカもまた、武器を取り出し、槍のように構える。しかしルークが見た彼女の表情には、緊張のようなものがあつた。

「ブランカ、スライムは『異物の魔物』と一緒に。コアを潰せば倒せる。臆するな」

「は、はい！」

そしてデカイムが体を大きく引き伸ばし、威嚇行動をとったのと同時に、ルークが先陣を切ってデカイムに切りかかった。

〈八話へ続く〉